学生の声

「伝える」

情報学研究科　知能情報学専攻　松山研究室　博士後期課程１年　石　川　惠理奈

研究者として生きていくためには、当然ながら得られた成果を論文として正しく言語化することが不可欠です。しかし近ごろ、それだけでは足りず、さらに相手に「伝わる」形で出力する力が必要だと痛感しています。論文や研究費の申請書上だけではなく、研究コミュニティの中で自分の研究をアピールして「こいつはこういう研究をこういうアプローチでやってるんやな」と、まず他研究者に知ってもらわないことには好機が育たないということです。

例えば、会議の場での研究発表において、「うまくいった」と言えるのはどういう場合でしょうか。ミスせず穏便に済めば御の字でしょうか。もともと私もその程度の考えでした。しかし研究者のタマゴとしては、決してこれではいけません。淡々と棒読みで発表する学生の話を、会場のどれだけの人が集中して聞いてくれ、後で思い出してくれるでしょうか。研究発表の場は、見方を変えれば「会場の研究者に問題・アプローチの妥当性を一緒に考えてもらえる貴重な時間」だと言えます。わかりやすい発表に成功すれば、有益な議論・フィードバックの獲得に結びつきます。さらに言えば、研究に興味を持ってもらうことで研究者間の繋がりをつくり、新たな道が開かれる可能性もあります。他者に「伝える」ためには、相応の努力を要します。まず注意を引き付けるため、「見せ方」にもこだわる必要があり、理解してもらうために聞き手の立場に合わせた表現を選ぶ力が必要です。これらは一朝一夕で身につくものではありません。日頃から積極的に議論の場に立って、試行錯誤の中で訓練していくしかないと考えます。そして最後に、伝わったものを記憶に残すため、勇気を出して積極的に他研究者に話しかけるべきです。たとえ未熟者でも、一合とっても武士は武士、時には胸を張って自分の研究を発信する必要があると考えています。

「留学生からの教訓」

工学研究科　電気工学専攻　引原研究室　博士後期課程２年　窪　田　まど華

大学に入学してから常に留学生と接する機会があった。そしてこの冬、私も短期ではあるが海外の大学で過ごす機会を得ている。それに向けて心掛けなければならない事について、今迄一緒に過ごしてきた留学生の振る舞いから学んだ事を私なりに要約する。

まず英語や現地の言葉を流暢に話す能力を持っているに越したことは無いが、それが最大の武器ではない。自分の考えや伝えたい事を持っていなければ、つまり自分自身の研究について十分に理解していなければ、どんなに素晴らしい言語変換能力も滑稽に映る。伝えたい事さえしっかり持っていれば、言語は後から付いて来るのではないかと考える。また現地の食べ物を頂く（出来れば美味しく）というのはある種、入村の儀式のようなものであると思う。自分たちの食べ物が相手に受け入れられると、何となく自分達自身も受け入れられた気になり、じゃあ私達もあなたを受け入れましょうとなる。

さらに多くの留学生が、来日した当初は惨めな気持ちなるそうだ。周りは誰もそんな事を思ってないのに、疎まれているバカにされていると思って息を潜めてしまうらしい。ここで優しく働き掛けてくれる人物が登場すれば良いが、いない場合すれ違いが始まり、鬱屈とし始めた感情は自然と学業への気持ちも蝕んでしまう事がある。誰かに相談したり、はったりでも良いから人と関わる姿勢を持っていた彼らは本当に強い。

他にも留学生が教えてくれた事を挙げれば限りが無い。まだまだ彼らの教訓を実行できてはいないが、彼らと一緒に過ごす環境を整えてくれた大学と彼らに感謝する。